

TJFニュース

「TJFニュース」では、TJF（国際文化フォーラム）の活動報告や、事業に関連するさまざまな動きをニュースとしてまとめ、お伝えしていきます。

■中国語・韓国語教育関連プログラム 中韓合同の教師研修を初めて開催

TJFは、桜美林大学と共催で2009年高等学校中国語・韓国語教師研修を8月1日（土）から5日（水）まで、桜美林大学PFC（神奈川県）で開催しました。この研修は、駐日中国大使館教育処と駐日韓国大使館韓国文化院の特別共催、文部科学省、駐日韓国文化院世宗学堂の後援、かめのり財団の助成を得ました。本研修は、中国語教師と韓国語教師を対象とする研修を合同で行ったこと、中国語や韓国語の教師だけでなく、ほかの外国語の教師も対象に外国語教育についての講義を行ったこと、さらには授業案づくりに取り組むなど実践的であると同時に、外国語教育のあり方について考える研修であったという点で画期的なものでした。

前半2日間の講義には、中国語や韓国語の教師、ほかに英語、ドイツ語、フランス語、日本語を担当する教師約100名が参加しました。中央教育審議会外国語専門部会委員等を歴任され、学習指導要領にも詳しい吉田研作教授（上智大学）に、英語教育を中心に日本の初等中等教育における外国語教育の目標と課題についてお話いただきました。

また、米国ナショナル・スタンダード★注1の日本語作成委員長を務めた當作靖彦教授（カリフォルニア大学サンディエゴ校）に、効果的な外国語学習、外国語教育における文化・言語能力



（上）熱心に講師の話に耳を傾ける研修生。（下）グループワーク風景。

の評価、コミュニケーション能力養成のための外国語教育カリキュラムの作成などについて講義していただきました。

いずれの講義も刺激的な内容で、1日目だけの予定だった参加者から、急遽2日目の受講希望が出るほどでした。

後半3日間は、高校で中国語およ

び韓国語を担当する教師を対象に、前半2日間の講義をふまえて、授業案を作成するという実践的なカリキュラムを組みました。中国語、韓国語別にグループに分かれ、各言語担当の5名の講師陣による指導のもと、グループごとに「学習のめやす」★注2を活用した、具体的な授業案づくりに取り組み、最終日にはポスターセッションによる成果発表・検討を行いました。グループワークを初めて体験する人には戸惑いもあったようですが、日頃孤独な作業となりがちな授業案づくりを仲間との協働作業で行い、作成した授業案について忌憚なく意見交換を行いました。

外国語教育のあり方を再考

5日間の研修を通して、言語そのもの（例：語彙、文法規則など）を授業の中心にするのではなく、職業、買い物、社会といったテーマを授業の中心に据えると同時に、言語活動の達成目標を設定したうえで、テーマの内容に関する語彙・文法・表現を入れていくという教育方法や、そういった教育方法の背景にある考え方や理論の概要などを参加者で共有することができました。加えてそのような教育方法を取り入れている「学習のめやす」を活用し、授業を設計していく具体的な方法についてグループワークを通して考える機会を提供することもできました。

また、中国語と韓国語を中心に、外国語教育を担当する教師がことばの垣根を越えて、人としての成長を促す外国語教育のあり方について共に考え、外国語教師のネットワークを形成することができたことは大きな成果だったといえます。より多くの教師とこういった場を共有したいという参加者の声は、事務局スタッフにとって大変うれしいものでした。

研修終了後に参加者から寄せられた、「内容が多すぎて消化しきれなかった」「もう少しゆっくりやってほしい」「用語がわかりにくかった」といった声を踏まえ、来年度の研修を企画、実施していきたいと考えています。

（中野敦）

★注1：ナショナル・スタンダード（Standards for Foreign Language Learning for the 21st Century）とは、五つの学習目標と11の学習基準から成り立つ、連邦政府からの支援を得て全米外国語教育協会（ACTFL）を中心に作成された学習基準のこと。

★注2：TJFで検討・開発を進めている高等学校における中国語および韓国語教育の教育目標や内容、方法について、共通に参照できる枠組みのこと。<http://www.tjf.or.jp/jp/publication/wakaru/meyasu2007v00.html>

■中国語教育関連プログラム

第3回高校生サマーキャンプを実施

TJFは、中国語を学ぶ日本の高校生92名と引率者8名、計100名の参加を得て、第3回「中国語を学ぶ日本の高校生のための短期中国研修」(別称「漢語橋:日本の高校生サマーキャンプ」)を、7月25日(土)から8月3日(月)の日程で北京にて実施しました。この研修は、中国国家漢弁が主催するもので、文部科学省の協力、在中国日本国大使館、駐日本中国大使館の後援を得ています。

これまでと同様、「中国語ネイティブによる語学研修と中国語を使った実践活動」「高校生をはじめとする現地の人びとの交流」「市内見学を通じての社会学習」「中国文化体験」の4項をプログラムの骨子に据えながら、今回はいくつかの新しい試みを織り込みました。

一つめは、北京経済技術開発区実験学校^{★注}に受け入れ校となってもらったことで、前半の6泊7日は、参加者は同校の宿舎に寝泊まりしながら、同校の教師による中国語や文化体験の授業を受け、在校生代表と交流するなど、1ヵ所にとどまって、勉強、交流を行うことができました。これによって、効率的な運営ができたばかりでなく、参加者も寄宿生活を体験できました。

二つめは、念願だった家庭訪問の実施です。参加者は10グループに分かれて、受け入れ校の教職員や生徒の家庭を訪問し、授業で学習した中国語を使って交流しました。全員、たくさんの果物やお菓子が歓迎され、お土産までいただいたようです。訪問後の全体報告会では「歓迎されて本当にうれしかった」「中国人の優しさにふれた」「日本に関係のあるも

のが家の中であってびっくり」「僕の家よりもずっと広くてきれいだ」「お子さんのピアノや琴の演奏を聞かせてもらって、教育熱心であることがわかった」などの感想が聞かれました。

三つめは、現地の高校生との交流で、日中の高校生がケンタッキーのハンバーガーを一緒に食べながら、日本の高校生から事前に寄せられた多くの質問に現地の高校生が答えるという試みでした。質問は学校生活、趣味、流行、日本および日本人についての印象や興味、母国中国についての認識など、多岐にわたっていました。中国の高校生から日本の高校生に質問する時間がとれず残念でしたが、連絡先を交換した生徒も多いことから、個別の交流が続くものと期待しています。

今回は、新型インフルエンザの影響が心配されるなか、中国側主催機関および受け入れ校の英断のおかげで、予定どおり実施することができました。また、家庭訪問や受け入れ校の高校生との交流に関しても快く引き受けてくれました。今後もインフルエンザ対策をはじめ安全にプログラムを実施していくためにさまざまな対策を講じながら、中国語を学ぶ、より多くの日本の高校生に研修の機会を提供していきたいと考えています。

(長江春子)

★注:小中高一貫教育を実施する私立校で、国際コース、芸術コース、留学生コースを併設し、在校生は1,700人、1,500人を収容する寄宿舎を備える大規模な学校。

■中高校生の交流関連プログラム

「つながる」をオーストラリアで発表

TJFは、シドニーで開催された全豪現代言語教師会(AFMLTA)の全国大会(7月9~12日)と豪州日本研究大会・日本語教育国際研究大会(JSAA-ICJLE 2009、7月13~16日)に参加しました。

AFMLTAでは、スミス・ヒル高校(ニューサウスウェールズ州)の日本語教師キャロリン・デイヴィッド氏と共同で「つながる」の成果や課題、日本語の授業と関連づけた使い方について発表しました。

JSAA-ICJLE 2009では、国際交流基金シドニー日本文化センターが主催するパネルセッション「ILTL (Intercultural Language Teaching and Learning) ^{★注}をオーストラリアの学校の日本語教育にどう取り入れるか」に参加しました。このセッシ



日中高校生交流会では、約30名の現地高校生が参加し、意見交換やスポーツ交流を行った。

ョンでは、現在オーストラリアの言語教育で主流となっているILTLを教師研修、教室活動、遠隔地教育という三つの分野でどのように取り入れ、実践しているか、



AFMLTAで「つながる」を使った実践について発表するデイヴィッド氏。

国際交流基金シドニー日本文化センター、TJFとキャロリン・デイヴィッド氏、西オーストラリア州教育省がそれぞれ発表しました。TJFとデイヴィッド氏は、教室活動においてILTLを実践する一つの方法として「つながる」を使った事例を紹介しました。また、それぞれの機関や教師がILTLに取り組んでいくなかで、どのように互いに協力しあったのか、あるいは今後どのような協力が可能なのかディスカッションを行いました。

(室中直美)

★注：ILTLの詳細は、『国際文化フォーラム通信』第81号のp.8を参照。http://www.tjf.or.jp/newsletter/pdf_jp/F81

■日本の高校中国語教育関連プログラム

15名の教師が吉林大学の研修に参加

TJFと中国教育部、文部科学省との共催で「高等学校中国語担当教員研修」が、7月27日(月)から8月8日(土)まで、吉林大学(中国長春市)で実施されました。この研修は、2004年から5ヵ年計画で始めたものでしたが、第5回の研修後に行ったアンケート調査で、ニーズがまだあることがわかったことから、吉林大学と協議のうえ、継続することを決めました。



研修生の作文から生まれた、波乱万丈の半生を送ったパンダの物語を上演。

今回は現地集合・解散とし、研修会場までの交通費は本人が負担することになったため、参加希望者が少ないのではないかと心配しましたが、11都府県から15名の教師が吉林大学に集まりました。この研修では、参加者の中国語のコミュニケーション力の向上と教授法習得をめざすとともに、中国人家庭の訪問や長春市内の中学校の日本語教師との交流等を通じて中国語理解を深めることをめざしました。参加者は、「このメンバーで研修に参加できてよかった」ということばを残して研修会場を後にしました。6期生の強い連帯感を促したのは、成果発表会で披露した中国語劇でした。脚本、衣装はすべて手作り、每晚遅くまで全員が練習に参加しました。研修で学んだ内容を盛り込んだこの劇は、講師たちの喝采を浴び、吉林大学教授で主任講師の劉富華氏に、「来年から中国語劇を成果発表の課題にする」と言わしめたほどでした。

参加者からは、連絡のために研修前に設けたメーリングリストに、帰国後もたびたび投稿があります。メールの一つひとつから、研修で刺激を受け、引き続き中国語の勉強に励みたいという決意や、高校の中国語教育の発展に尽くしたいといった決意が伝わってきます。

(水口景子)

■韓国語教育関連プログラム

韓国語教師研修を初めて九州で開催

TJFと駐日韓国大使館韓国文化院、韓国国際交流財団との共催で、韓国語教師研修を8月6日(木)から11日(火)まで九州産業大学で実施しました。この研修は、高校、大学や市民講座等で韓国語を教えているか、将来教えたいと考えている人を対象に、韓国語の教授法の向上を目的に実施されたものです。2004年から始まったこの研修は、これまでに京都、東京、大阪で開催してきましたが、今回初めて九州での開催となりました。全受講者44名のうち、九州在住の受講者が6割を超え、地域内および他地域の講師との交流の機会を提供することができました。

受講者の所属機関は大学と市民講座がそれぞれ約3割、中高校の教員は受講者全体の2割でした。母語別の受講者は日本語が約6割、韓国語が4割でした。来年度は、名古屋での開催を予定しています。受講者の所属機関なども考慮に入れながら、すでにカリキュラム案の検討に入っており、

模擬授業の実習を含む、従来よりも授業実践に重きをおいた構成を検討しています。

(小栗章)

■大連の日本語教育関連プロジェクト 『好朋友 ともだち』第5冊が完成

TJFが2006年から大連教育学院とともに編集・制作に取り組んできた中国初の第二外国語教育用日本語教科書『好朋友 ともだち』の第5冊(試行版)が9月に発行され(B5判/128頁/カラー/5,300部)、これによって全5冊シリーズが完成しました。



ストーリー漫画を軸にした高橋美佳と大連の中学生5人をめぐる友情物語も第5冊をもってついに完結です。美佳たち6人は旅行先をめぐって口論した末、大連郊外にりんご狩りに行き、友情をさらに深めます。しかし、美佳は父親の仕事の都合で横浜に戻ることにになります。友だちの王志鵬が、大連空港を飛び立つ美佳を、以前美佳の家で見つけた『竹取物語』のかぐや姫と重ねるシーンには誰もが胸を打たれるでしょう。

第5冊では、漫画のストーリーに沿って「旅行の計画」や「別れ」などのトピックを取り上げ、人と人との関係を紡ぐことについて考えさせる学習活動を紹介しています。巻頭のグラビアページでは、多くの写真を用いて、世界各地の多国籍、多民族の人びとが参加する国際会議やボランティア活動などの現場を紹介するとともに、そこで活動するさまざまな年齢、職業の人びとを紹介し、協力の大切さ、つきあっていくことの楽しさや難しさ、対等な関係で共存していることを伝えています。

「人間関係の温暖化」と「多文化共生」の理念のもと2006年から続けてきた編集・制作はひとまず終了しますが、今後は完成版発行に向けて改訂作業に着手していきます。

(森本雄心)

■TJFウェブサイト トップページをリニューアルしました

TJFウェブサイトの主なコンテンツを、小中高校生の交流、日本語教育、中国語教育、韓国語教育の四つに分け、目的

に応じて関連するページや情報にアクセスできるよう、トップページ左側のメニューボタンを改訂しました。さらに、これらのメニューから入ったページに、こういった情報があるのか、一瞥してわかるように各コンテンツの概要をリストで示しました。



Google検索の機能を利用して、TJFウェブサイト内のページ検索、画像検索ができるようになりました。画面右上の検索欄に、探したい情報に関するキーワードを入力すると、関連するページや画像のリストが表示されます。

TJFウェブサイトがより使いやすくなるよう、今後も改善を続けていきます。

(森亮介)

実施事業一覧 (2009年7月・8月・9月)

- 全豪現代言語教師会 (AFMLTA) 全国大会にて「つながる」発表 (7月/豪州シドニー)
- 豪州日本研究大会・日本語教育国際研究大会 (JSAA-ICJLE 2009) にて「つながる」発表 (7月/豪州シドニー)
- 中国語を学ぶ日本の高校生のための短期中国研修実施 (7~8月/中国・北京)
- 平成21年度高等学校中国語担当教員研修共催 (7~8月、中国・長春)
- 第2回クムホ・アジアナ杯「話してみよう韓国語」高校生大会韓国研修ツアーおよび韓国語研修共催 (7~8月/韓国・ソウル、キョンジュほか)
- 『国際文化フォーラム通信』第83号発行 (7月)
- 『小溪』No.41発行 (7月)
- 2009年高等学校中国語・韓国語教師研修共催 (8月/神奈川県)
- 2009年外国語担当教員セミナー共催 (8月/神奈川県)
- 韓国語教師研修2009共催 (8月/福岡)
- 「つながる」教師向けワークショップ実施 (8月/大阪)
- 『Takarabako』no.21発行 (9月)
- 『ひだまり』第40号発行 (9月)
- 『事業報告2008—2009』発行 (9月)

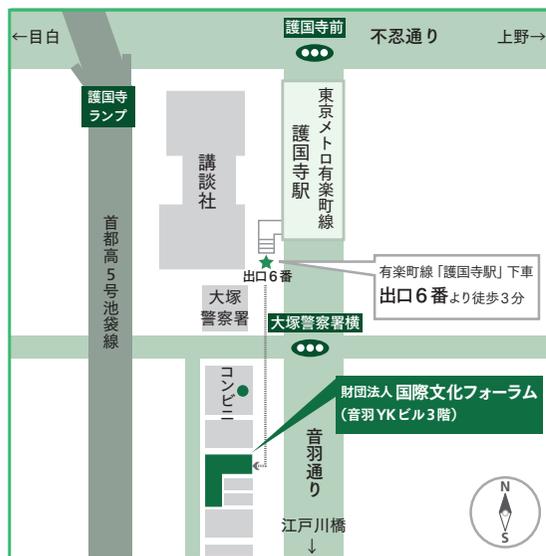
事務所を移転します

TJFは、このたび事務所を下記に移すことになりました。移転日は11月28日(土)、新事務所での業務開始は12月1日(火)です。

これを機に職員一同気持ちを新たに、公益財団法人への移行認定をめざし、これまで以上に質の高い公益活動を継続していきたいと考えています。今後とも一層のご支援ご協力をよろしくお願いいたします。

移転先

〒112-0013 東京都文京区音羽1-17-14 音羽YKビル3階
TEL 03-5981-5226 FAX 03-5981-5227



第3回クムホ・アジアナ杯「話してみよう韓国語」高校生大会参加者募集中!

日本の高校生が韓国語と韓国文化に対する関心を高め、韓国語と日本語による表現力や伝達力を向上させることを目的に開催しているコンテストです。クムホ・アジアナ文化財団、駐日韓国大使館韓国文化院、日中韓文化交流フォーラム、TJFがこれを共催しています。ただいま第3回大会の参加者を募集しています。

応募資格: 本選時に日本の高等学校またはそれに準ずる専修学校や各種学校、高等専門学校の1~3年で、20歳未満であること。

部門: 韓国語スピーチ部門、韓国語スキット部門、日本語エッセイ部門
締め切り: 2010年1月22日(金)

締め切り後に予選審査を実施し、本選出場者を決定します。

本選: 2010年3月13日(土)13時~(韓国文化院ハンマダンホールにて)

大会の詳細については、www.asiana.co.jp/speech をご覧になるか、TJFまでお問い合わせください(メールの場合は hanakan@tjf.or.jp まで。電話の場合は03-5322-5211、12月1日以降は03-5981-5226まで)。

第31回よみうり写真大賞高校生部門「フォト&エッセーの部」作品募集中!

TJFが1997年から2006年まで開催した「高校生のフォトメッセージコンテスト」を、読売新聞社が継承して2008年から実施しているもので、TJFはこれを後援しています。締め切りが迫っていますが、たくさんの応募をお待ちしています。

応募資格: 2009年4月時点で、日本の高等学校またはそれに準ずる学校に在学している方。

応募作品: 1人の高校生(自分自身をのぞく)を主人公とした、2~5枚の写真と文章(200字程度)。

締め切り: 2009年11月20日(金)

詳細は、<http://www.tjf.or.jp/thewayweare2/jp/> をご覧ください。

編集後記

http://www.tjf.or.jp/newsletter/kouki/kouki_j.htm

人と人をつなぐネットワークの重要性は誰しもが認めるところであるが、ネットワークが強固な組織に成長するまでにはいくつものハードルを越えなければならない。

本特集で紹介した教師ネットワークは、地道に自分たちの手でネットワークを築いていっている事例である。ネットワークの活動といってもさまざまな意味合いがあり、またネットワークの発展にもいくつかの段階があるように思う。

本特集でも記したように、第一段階は、教師が意気投合できる仲間と出会い、それぞれが抱えている悩みや関心、考え、問題意識、理想について語り合い、つながるという段階。お互いに情報を交換し、助け合い、啓発し合うことで生まれる共有意識や仲間意識が、孤軍奮闘してきた教師に充足感と活力をもたらしている。

第二段階は、ネットワークならではの教育交流が促進される段階である。ネットワークを通じて、教育関連情報の交流や教育実践・研究活動(授業設計や教材開発など)の相互啓発や協働開発作業、そして教師個人を超えて、学校や地域間の交流が促進される段階である。

第三段階は、ネットワークが一つの組織体として、地域や日本全体、ひいては海外も含めて、より広域の教育活動を推進したり、教育環境の変革に向けて運動を展開する段階である。

段階が進むにしたがってますます大きなエネ

ルギーが必要となり、中核となって活動してくれるメンバーが不可欠となる。しかし、小中高校の教師は多忙を極めていて、本来の教科指導に加えていくつもの任務が学内で課せられていることが多い。最近、教師は会合や事務に忙殺され研究活動に時間がとれなくなっていると聞く。

TJFは特集で取り上げたネットワークとこれまでさまざまな形で関わってきた。既存のネットワークと連携したり支援を行ったりして、側面からその活動を応援してきたネットワークもあれば、ネットワークの立ち上げに関与し、共に試行錯誤を重ね歩んできた事例もある。

しかし、子どもたちに対する深い愛情と見識をもち、使命感に燃えた教師を、事務面で、あるいは財政面で後押しすることで教育環境が改善されることに私たちがやりがいと喜びを感じてきた。一方、これらのネットワークでつながった教師からTJFは実に多くのことを学び、事業を推進するうえで助けてもらってきた。自分の生徒のためだけでなく、教育全体のために自らの時間と労力を費やしてくれる教師なしにはTJFの公益事業は成り立たない。TJFにとって教育的使命を共有できるネットワークはまさに宝物である。

中野佳代子

財団法人 国際文化フォーラム
THE JAPAN FORUM



国際文化フォーラム通信 84号
2009年10月発行

発行人・編集人 中野佳代子
デザイン・DTPオペレーション 飯野典子
フォーマット設定 鈴木一誌
出力・印刷・製本 凸版印刷(株)
校閲・校正(有)天山舎

財団法人 国際文化フォーラム

〒163-0726 東京都新宿区西新宿2-7-1
新宿第一生命ビル26階
TEL 03-5322-5211 FAX 03-5322-5215
E-mail: forum@tjf.or.jp
<http://www.tjf.or.jp/>